

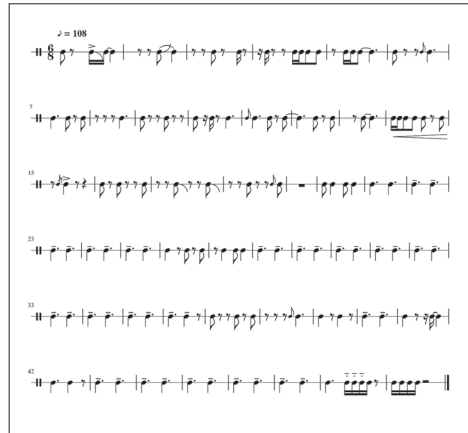
守章

MORI Akira

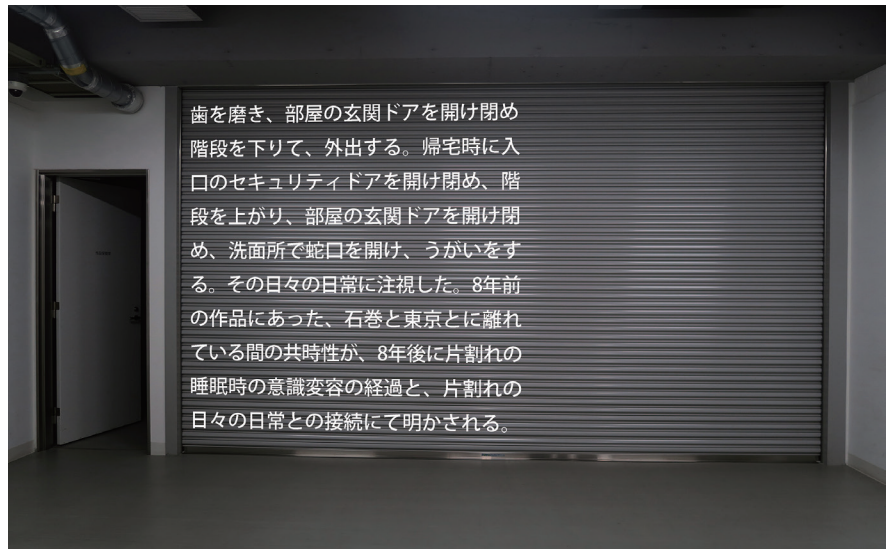
2010年8月から9月にかけて、石巻市在住の守雅章と、東京都渋谷区在住の守喜章の間で、インターネット通話サービス、スカイプを通し、同時刻に数を読み上げる試みが行なわれた。

長らく、東京と石巻という離れた環境で制作を続ける中で、環境の違いを越えて、共鳴する様相に特化した作品制作と、作家同士の日常性を網羅する、ユニットとしての広がり画策した制作活動であった。2010年9月12日の収録後、今後の予定を相談している最中に、意見の決裂が起き、作業は中断された。以降、2人のユニットとしての活動は、現在まで途絶えたことになる。

2018年5月、就寝中に「覚醒」と「睡眠」の間の状態を、録音機材により収録する試みが、石巻市にて行なわれた。2010年9月12日の収録後、2人のユニットとしての活動は、現在まで途絶えたこともあり、新たな制作の依頼は未知数であった。8年の空白期間を経て、お互いに見いだされることに注視した。



《AM(zzz02'47") score》2018年



《AM(Dayzzz) Ver.ycag》2019年

インタビュー

ユニット「守章」として活動を始めた経緯
喜章氏(以下、Y) | 1996年にユニットを結成したのですが、一緒に制作するようになったきっかけは二つあります。一つは1995年、兄の個展会場*1での出来事です。アーティスト・トークがあって、兄が作品について説明していた時、会場だった画廊の取扱い作家たちがいくつか質問しだして、兄がそれに答えることができなくなり、私が急遽質問に答えるということがありました。それまでは、兄と私はそれぞれ違う作品スタイルだったし、それぞれの領域には関わらなかったのですが、それをきっかけに一緒に対話するようになりました。もう一つは、自分の作品の中で境界線に興味を持ち始めて、自分の身体の前後、左右といった境目のようなものを考えている時に、新聞紙を同心円状に巻いて重ねていく作品を二つ同時につくったんです。二つというオブセッションがあって、それをお互いを感じ出したのが同じ時期であったことが、ユニット結成のきっかけとして大きかったです。

雅章氏(以下、M) | 個展の前に、私が作品について考えていたことを弟とよく話していました。私個人で考えた作品でしたが、私の代わりに弟が作品の説明をしだしたというのは、考えを共有しているという関係性があったからかもしれません。ユニットを結成するにあたり、どちらも主導権をとれないような方法を検討しました。カメラは二人の間の中立な立場で、目の前にあるものを公平に写すということで、ビデオ作品をつくり始めました。

1996年から2010年までの制作
ーユニット結成から活動が途絶えるまでー
Y | 結成当初は、杉並と世田谷という少し離れた場所でしたが、二人とも東京に住んで制作していました。1997年から1999年の間、私だけCCA北九州のリサーチ・プログラム*2に参加するため北九州に引っ越しました。兄は東京にいて、離れた環境での制作を1999年まで続けていました。1999

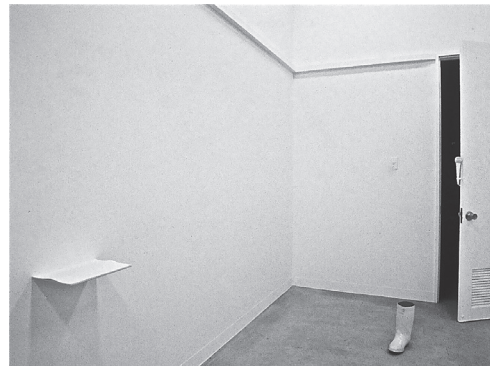


Fig.1

年は北九州と石巻になります。離れている間につくった象徴的な作品が、《AM(Close)》(1998年)Fig.1です。closeには、「近づく」「閉じる」という両方の意味があるのですが、そういったものを強迫観念的につくってました。「Close To You」というカーペンターズの曲のフレーズがずっとリフレインするようなサウンド・インスタレーションや、北九州と東京の間のファクスのやりとりを作品にしたりしていました。

M | 手紙のやりとりもありました。CCA北九州でアーティスト・トークというかたちでプレゼンテーションする機会があったのですが、私も呼ばれて行っていました。

Y | 2000年から2008年は東京と石巻での制作で、2001年に山口県の秋吉台国際芸術村にユニットで行き、3ヶ月間滞在制作をしました。一緒の環境での制作は久しぶりで、制作に没頭できました。地元の小学校の習字の時間に生徒たちのニックネームを取材し、少し変わったルールの習字会をして作品をつくりました。《Nick》(2001年)Fig.2という作品です。それまでは、カメラを前にしてお互いの関係性をテーマにつくっていたのですが、あるルールの中で私たちが登場しない初めての作品になりました。

M | 滞在制作の時は、スタジオで四六時中話をしていました。ユニットでの活動初期に、お互い背中合わせになり、身体を支え合うというビデオ作品を制作したのですが、《Nick》をつくる時、自分たちがブックエンドのように何かシェアできるかたちを出せないか考えました。当時、シェア＝共有することについてよく話していました。

Y | 2002年からは、私一人で《終日》シリーズの制作を始めました。このシリーズでは、全国津々浦々フィールドワーク的に、夕方に鳴る防災無線の音・音楽を採取していました。住民へ防災情報を伝達する通信システムである防災無線が、普段は夕方に和むような音楽を流す理由は、非常時にスピーカーがきちんと鳴るかという日々の行政チェックのためで



Fig.2

す。そういった目的を持つものがぼんやりした音楽を流すというのが、とても日本的なシステムだと思い興味を持ちました。《終日》シリーズの取材を続けたかったので、2008年に一度仕事を辞めて石巻に戻ったんです。石巻を拠点に取材する暮らしを続けていて、ユニット的な作品はつくらなくなっていました。2009年から2014年は、東京に戻ったのですが、2010年に、離れた環境で活動するユニットとして、スカイプでボイス・サウンド・インスタレーションのようなかたちの制作を継続していくプランがありました。結局、一つ作品をつくってやめてしまい、それがユニットでの制作が完全に途絶えるきっかけになりました。私は、《終日》シリーズを制作する中で、自分の外側にある世の中のことを取材し作品化することに目覚め、ユニットでお互いの間の関係性を作品化することに興味がなくなりつつありました。

M | ユニットでの制作は途絶えるのですが、「こういうものを見つけたよ」といったやりとりはしていました。

東日本大震災

Y | 私は当時東京にいて、被災した兄をはじめ家族と連絡がとれない時間がありました。石巻の実家近くは、完全に環境が変わってしまったので、制作を抜きにして兄や家族が違う次元に行ってしまったような、共有できない部分がありました。

M | 《終日》シリーズのコンセプトは、いざ有事になった時に防災無線がサイレン・警笛になるということでした。けれど2011年に震災があって、世の中に対して自分はこんな発言をしてよいのだろうかという葛藤があったと思います。

Y | 2012年の遊工房アートスペースでの展覧会「終日二十三区」Fig.3,4で、路線バスをチャーターして遊工房のメーリングリストから人を募り、私の知人にも声をかけて、参加者の自宅や職場にバスで迎えに行き、最終的に遊工房まで送るというプロジェクトを実施しました。バスの車内音響を遊工房にスカイプで中継したんです。バスの車内では、例え

ば千代田区で乗ったら千代田区の防災無線が鳴るというルールをつくりました。それを聞きながら一日過ごし、参加者が共有したことをお互い話していく過程で、防災無線を使ったプロジェクト《終日》シリーズを続けてもよいのではと思うところに引き返せるようになりました。2011年以前から防災無線について取材をしていて、少し皮肉っぽく世の中を見ているところがあったのですが、現実が自分の作品を追い越したところがありました。2012年3月11日におこなったプロジェクトは、自分に引きつけて冷静に作品を見る機会になりました。

ユニット再開

Y | 2018年に釧路市立美術館で富田俊明さん*3との二人展「リップ・ヴァン・ウィンクルからの手紙」*4がありました。富田さんは20年来の知り合いで、ユニットの活動をよく知っています。彼は企画の段階で「やっぱり守章はユニットじゃない」と言い出して。正直言って強迫的に迫られて、ユニットで制作しました。

M | 2011年の津波で全部流されたと思ったら、ある時バインダーの間から、富田さんからの手紙が出てきました。20年前、富田さんが手紙を使ったプロジェクトを考えていたらしく、私たちとの共同プランが書かれていました。釧路での二人展のタイミングだったので、その機が来たと思いました。

Y | 富田さんとの二人展がなければ、ユニットの再開はなかったと思います。今回の展覧会のタイトルは「対話のあとさき」じゃないですか。何か全てがつながっているように思います。

「新・今日の作家展2019」出品作品

Y | ユニットが断絶した作品《AM(273)》と、再結成するきっかけになった作品《AM (Dayzzz)》、二つで一組の作品を展示します。《AM(273)》は、スカイプでお互い同じ時間に数を数え合うというもので、最後は273なんです。ジョン・ケージの作品《4分33秒》を自分たちのモチーフにするというルールを設け、彼が生んだ歴史的な時間をお互い離れた場

所で活動するユニットのモチーフにできないか試みました。ジョン・ケージが、聴衆である観客と演奏者の間に存在する制度へ向けた「或る」投げかけを、私たちは二つの離れた場所から、同時刻に数を唱える、声に変換しました。ジョン・ケージの《4分33秒》には、受動的で孤立した鑑賞者、すなわち囚われた観客を批判することが起点にあったと思います。私たちの作品では、数字を通した声の干渉が、人びとに波及し受け止められながら、私たちユニットの環境を変換する狙いがありました。《AM (Dayzzz)》制作時は、洞窟壁画についての文献を随分読んでいました。人が意識変容状態の時に、ものを表現することが生まれたということについて調べていて。兄がすごくいびきをかくので、その状態をICレコーダーで録ってもらおうと思い、石巻にいる兄にICレコーダーを送りました。何か一緒につくろうという状態ではなかったため、まずどう素材を持ち込めるか探っていました。

M | 意識変容状態というのをどうにかして一つのかたちにできないか、ということがいびきだったのですが、録音された音源を聞いてみると、睡眠中の呼吸音から言語に移行するように変容して感じられました。無意識な呼吸音だけど、言葉として伝えているような不思議なものになりました。

Y | ICレコーダーは、無音状態になると一度機械が止まるんです。何か音が鳴り始めたら再開するかたちで、タイムラグがあります。そのタイムラグ自体がラップのように聞こえました。

M | 機械が自動で止まるから、機械の境目で現象が起きると思うのですが、一つのリズムになるんですね。

Y | 兄のいびきだけでは、ユニットとしての作品にならないと考え、録音技師に私の家に来てもらい、歯を磨いたり水を飲んだり、部屋を出る時など一日のルーティンの音を全部録ってもらって、兄のいびきと合体させました。それが今回出品する《AM (Dayzzz)》です。

「対話のあとさき」

M | 「対話のあとさき」というタイトルは興味深いです。「あとさき」という言葉はあるけれど、「対話のあとさき」というのは造語だと思います。すごく広がりのあるタイトルでありながら、謎の暗号のようにも感じました。「あとさき」って特殊な言葉ですよ。最初に過去があり、そして未来がある。弟とは、お互い離れていることが多く、かつては主に書き文字でのやりとりをしていました。時々電話で話しますが、書くことでお互いのオブセッションや、感情のやりとりもできて。今のようにメールでやりとりはしていなかったのですが、その時々タイムラグがあり、最初に書いていた感情的な言葉を、返事がくる頃には全部忘れていたことも

ありました。そのやりとりが面倒くさくもあり、面白くもあり、両方あって。何か転がって今のユニットのかたちになっているような気がします。それを対話というかわからないですけども、目に見える言葉のコミュニケーションということになるでしょうか。

Y | 作家として作品をつくる上でのオブセッションと、兄弟げんかのオブセッションは違いますが、うまく絡んで作品になることもあるし、長くユニットで制作を続けていると、そのローテーションを維持することが難しくなります。1997年から2000年頃の兄との手紙のやりとりを改めて見ると、今のメールのやりとりとは全く質が異なります。メールのやりとりの往復は薄いんですね。

M | 釧路の二人展の時に、富田さんとメールのやりとりをしていて、印象に残った文章を私が抜粋したり、富田さんと弟、私の三人のメールの文章を編集したりして、一つの詩のようなものをつくり、それを二人展のステートメントにしました。書き言葉の手紙と情報の伝達の電子メールでの差があると思いますが、サンプリングのように一つ一つつないで編集するには、電子メールはとても便利で、何か新しいことができる可能性もあると感じました。

Y | メールや手紙の文章について、もう一度見るということの抵抗感や再発見が表現に結びつくと、最近改めて感じています。そういう機会をつくっていかないといけないと思いました。また、メールのやりとりも必要ですが、お互い話す機会をつくる必要があると思います。それぞれの違いや共有する感覚を再発見する。カメラで撮ったものも、改めて見ることで再確認することができます。そういった循環関係の中で自分たちを再発見していくのはすごく大事です。そのやりとりが表現活動につながっている気がします。

M | 対話から何かつながるといことが大事ですね。一定の時間、体験を重ねてその先に何か関係につながっていくことが、今後の希望です。

2019年6月16日 横浜市民ギャラリーにて 聞き手・編集 | 大塚真弓

- 1 1995年1月～3月の間に、双ギャラリー(東京)にて、守雅章、新津保建秀、中原周作、守喜章が、順番にそれぞれ個展をおこなった。守雅章の個展会期は、1月21日～2月1日。
- 2 CCA北九州は、非営利の公的学習・研究機関として、北九州市の助成により1997年に開設された現代美術センター。世界で活動する現代美術のアーティストや各分野の専門家を教授として招き、若手アーティストやキュレーターが学ぶプログラムが実施されている。
- 3 アーティスト。社会生活の中で抑圧されがちなパーソナルな領域を、親密な対話の空間を用いてエンパワーし解放することに興味を持ち、対話を基盤としたナラティブによる独特な相互主観的世界をつくりだす。
- 4 釧路市立美術館とFMくしろのタイアップ企画の展覧会「Path-Artの仲間たち 富田俊明×守章 リップ・ヴァン・ウィンクルからの手紙」2018年11月17日～12月23日。



Fig.3



Fig.4